

---

## 1. 東京オペラシティコンサートホール

---

ヒアリング記録

1997/10/29

財団法人東京オペラシティ文化財団 | プロデューサー 国塩哲紀氏(以前、岡山シンフォニーホール在籍)

---

### 東京オペラシティコンサートホール概要

- 平成9年9月10日開館。京王新線初台駅近接地に国と民間共同で建設された劇場都市“東京オペラシティ”内の中心的施設。
- 東京オペラシティは、国により建設・運営される第二国立劇場、民間により建設・運営される東京オペラシティコンサートホール、同リサイタルホール(286席)、同アートミュージアム(1999年秋完成)といった文化施設のみならずオフィス、商業施設をも併せ持つ大規模複合開発である。
- 東京オペラシティコンサートホールは座席数1632席、シューボックス型のクラシック音楽専用ホールでパイプオルガンを設置している。
- 当ホールの施設管理は東京オペラシティアーツ株式会社、当ホールでの自主公演の企画・制作は(財)東京オペラシティ文化財団が行っている。

---

### 1. 東京オペラシティコンサートホールにおけるホール間ネットワーク活動

- 今年9月にオープンした当ホールでは、オープニングシリーズをはじめとした独自企画の自主公演を初年度約60公演手掛けており、次年度以降の事業のいくつかは他のホールと組んで公演を実施できればと思っている。
- 共同公演とする場合の相手先は公立ホールが中心となろうが、その候補は常日頃から情報交換を行っている人的つながりのあるホールであり、その中で企画内容に適しかつ担当者が意欲的であるホールに声を掛けることとなろう。
- しかし、他ホールと組むにしてもまずは当ホールとしての存在意義(キャラクター)を明確化することが重要であり、これが他ホールと組む前提になると考えている。キャラクターがあつて初めて接点(類似点)のある他ホールと組む意味が出てこよう。例えば、限定的ではあるがクリスマスのパイプオルガン公演をサントリーホールとアクトシティ浜松が組んで実施したと聞いている。当ホールでもパイプオルガンを所有しており、パイプオルガン保有の他ホールと組んで公演を行ってみたい希望は持っている。
- 大都市圏(東京・大阪)ではまだまだホールが足りないと言われているが、実は官民ホール間で役割分担が出来ており、不足しているのは地元アマチュア団体等の公演の場として低廉な料金で利用できる公立ホールである。商業公演をリードしている民間ホールは既に量的には十分な状況にあるのではないか。

### 2. 公立ホールのネットワーク活動実施に対する見解

- 10年前頃からのホール建設ラッシュ、7~8年前頃からの各自治体での文化財団設立ブームを背景に、500~1,000席の特性が類似した中小ホール間でのネットワーク活動

が最初に行われ始めた。しかし、これらの中には各ホール間での足並みが揃わずにうまくいかなかった例もあるようだ。

- 岡山シンフォニーホール(平成3年開館:2,001席)在籍時代には、一度徳島県の民間プロモーターからの誘いでオペレッタ公演をネットワークを組んで実施(地域創造による助成事業)したことがある。しかしそれ以外では自発的に他ホールと組むことは行わなかった。その理由としては、他ホール担当者間で構想段階の話しは持ち上がるのだが、いざホール内で検討を始めると上層部の説得と予算確保が難しいためである。
- この経験から、他ホールと公演を共催するには、まず自分のホールの姿勢(理念)を明確化し、他のホールから手を組んでも良いと認められるホールを目指すことが先決であると考えている。ホールの姿勢を明確化することで、初めて共通する姿勢を持つ他ホールとのネットワーク活動が意味をなし、外部からの認知が得られるとともに、継続的な活動が可能となるのではないかと。
- 実際のホール間のつながりは人的つながりであるとしても良い。この人的つながりを継続的に保っていれば、時間はかかるかもしれないがその中から良い企画が生まれてくるのではないかと。このホール間のつながりを継続していく上での最大の課題は、担当者が異動してしまうとせっかく築いたホール間の関係が継続されにくい点にある。
- 官民を問わず、事業の企画担当者と館長クラスの上層部で目指すべき目標に差が生じてしまっているところにも、ホール運営上の課題がある。具体的には担当者は企画内容を重視する一方、上層部は入場者数に重きを置くため、企画内容が集客性を重視したものにならざるを得ないホールが少なくない。特に一つの事業を複数館で行うネットワーク公演の場合には、各ホール毎での集客実績に差が生じた場合に、その公演に対する評価がホール毎に分かれ次年度以降の継続性に影響を与えることも考えられる。その意味で、担当者レベルだけでは実際の事業進捗がスムーズに行えないケースもあるため、館長レベルでのつながりも必要であろう。
- 現在、ネットワーク活動へ参加しているホール間でも参加姿勢により「事業の一環として補助的活動と位置づけているホール」と「ネットワーク活動に頼っているホール」の大きく2つに大別されるのではないかと。既に自立したホールでは、ネットワークを組まなくても充分集客力を確保しているところも出てきており、一概にネットワークを組むことにメリットがあるかという点も十分に検討が必要であろう。
- 現在の公文協に参加しているホールをみると、自主事業を行っているホールが少なく、公文協自体にはホール間ネットワーク活動に対する積極的な印象をあまり受けない。
- なお、他ホールだけでなく、同一自治体内の別セクションとネットワークを組むことでも企画の幅を広げられる。例えば、以前岡山に九州交響楽団を招聘したときには、同時にホールのあるビルのイベントスペースで行った小倉祇園太鼓の実演が好評であった。また、同時に物産展等をセットしたり、他地域から観光とセットでツアーを組んでコンサート鑑賞を行ってもらおうような事業も可能となり、より面白い企画となるのではないかと。

以上